

PROFILE
04

岩手県
総務部長

加藤 主税 Kato Chikara

経歴

- 平成4年 4月 自治省採用
同 行政局公務員部給与課
- 平成4年 7月 岡山県地域振興部市町村課
- 平成6年 4月 自治省行政局選挙部選挙課
- 平成6年10月 同 行政局行政課
- 平成10年 4月 大分県企画部統計情報課情報企画室主幹
- 平成11年 5月 同 企画部企画調整課参事
- 平成12年 4月 同 総務部財政課長
- 平成14年 4月 総務省消防庁消防課課長補佐
- 平成16年 4月 同 自治税務局固定資産税課審査訴訟専門官
- 平成18年 4月 同 自治税務局市町村税課課長補佐
- 平成19年 4月 同 自治税務局市町村税課理事官
- 平成19年 8月 同 自治行政局市町村課理事官
- 平成21年 4月 岩手県地域振興部長
- 平成22年 4月 同 政策地域部長
- 平成23年 4月 現職

災害マネジメント、そして、復興に向けて

Schedule
ある1日のスケジュール

8:30 9:30 10:30 12:00 13:00 15:00 16:00 17:00 18:30

<p>出勤 メールや報道チェック。気になる点は、課長を呼んで状況を聴取し、必要に応じて対応を指示。</p>	<p>東京電力と交渉 放射線影響対策のとりまとめも担当。関係市町村長とともに、損害賠償交渉に臨む。先方のガードは堅いが、こちらも強い姿勢で迫る。</p>	<p>予算の編成状況の報告 予算調製課から予算編成の進捗状況を聴取。国の予算が越年編成のため、それに合わせたやりくりが悩ましいが、調整の大きな方向性を指示。知事肝いりの施策の扱いを相談し、前向き。これから正念場。</p>	<p>防災計画見直しの協議 災害の経験を踏まえた不断の見直しが続く。パブリック・コメントでは好意的な意見が多く、まとめの作業に入れる状況に安心。</p>	<p>退庁 部内の協議が長引いたり、急な用務が生じなければ、決裁文書に目を通し、帰りの支度。被災地で、県庁で、黙々と業務に励む職員に改めて感謝。防災用携帯電話が鳴り響かないことを念じつつ、帰途に。</p>
<p>議会事務局長の訪問 議会・会派の動向や議員の問題意識について意見交換。議長・委員長や会派責任者との接触も頻繁。</p>	<p>昼食 幼稚園児の二男と同じ中身の愛妻弁当。食後は、健康のため、県庁周りをウォーキング。</p>	<p>知事協議 復旧・復興業務のためのマンパワー確保策について、状況説明し、今後の対策を議論・検討。来年度の応援派遣職員の確保のため、各団体への働きかけを強化することに。</p>	<p>地元紙キャップの来室 県政の記事ネタを探している様子。所管にとまらず、県政全般について、しばし懇談。先方から情報を引き出すよう努める。取材は決して断らない。</p>	

PROJECT

岩手県の総力を結集し、震災復興に邁進する

今、岩手県について語ろうとするならば、東日本大震災を抜きにすることはできません。2年前の3月11日を境に、県組織が遂行しなければならない任務、解決しなければならない課題は大きく変貌してしまいました。

私は、その渦中に、総務部長に就任し、未曾有の大災害に係る応急対策に当たりました。応急対策の時期をようやく抜け出した後は、被災者に対する支援、膨大な復旧・復興事業の推進が待たなすです。組織体制を整備し、人員を手当てすること。どのような事業が求められているか汲み取り、財源を工面し、必要な予算を編成・執行すること。被災地の現実に即した対応を図るため、制度を改め、弾力・迅速な運用に努めること。危機管理、人事、財政、法規などを担当する総務部は、これらを主導し、とりまとめなければなりません。内部の事情を顧みて、手堅く調整するという総務部像は、跡形もありません。職員ともども、何をやらなければならないか、何ができるのか、必死で考え、被災地の復興を思い描き、走ってきました。

引き続き、様々な御支援・御協力をいただきながら、県の総力を挙げて、復興に取り組む岩手県。その中で、激動期の総務部長としての役割を果たしていきます。

迫られる災害対策

平成23年3月11日、この日は、私の公務員人生の中に最大の刻印を残すことになると思います。想像を絶する被災映像、情報が入ってこないもどかしさ、果たして岩手県はどうなってしまうのかという不安感。岩手県沿岸部は、大地震による津波に見舞われました。足下が音を立てて崩れていくかのような感に襲われたのを今も思い出します。

まずは、何よりも人命の救助、そして、津波をかくぐり避難した数万人に及ぶ方々に対する支援が求められました。甚大な被害により、十分な災害対応を行えない市町村もあり、県が担う業務が生じます。防災計画は想定されておらず、どこが部局が担うべきか定かでない事務は引きも切りません。

当初、私は政策地域部長という立場にありました。定められた部の防災業務は、比較的少なかったため、どこが担うのか扱いに困る業務を積極的に引き受け、職員を鼓舞・叱咤しつつ、様々な対応に明け暮れました。「前例や手本はない、でもたじろいでいては被災地・被災者に手が差し伸べられない、ひるまずぶつかるしかない」と、胸の内で自分に言い聞かせたものです。

4月になると、総務部長に転任。防災は総務部の所管、災害対策本部の副本部長として、知事を補佐し、応急段階をどうぐり抜けるの

か、対策を練り、実行に移し、また、自衛隊などの関係機関との調整に奔走しました。仮設住宅の建設が進み、避難所の解消にめどが立った8月中旬、県の災害対策本部も廃止に至り、防災服を脱ぐ日がやってきました。

復旧・復興への歩み

災害対策を講じつつも、復旧・復興への動きは始まっていましたが、復興計画が定まった8月以降は、フェーズが転換し、こちらの対応が中心になります。総務部としては、復旧・復興を進めるための十分な予算とそのための財源の手当て、膨大な業務を担う職員体制の整備・マンパワーの確保が重い課題です。各部局の業務推進を支えなければなりません。補正予算の編成は、10数次に及び、年度の予算規模は1兆円をはるかに超えて膨らみました。臨時議会も数度にわたりました。復興を統括する組織を立ち上げる一方、全国の地方公共団体に働きかけ、多数の応援職員の派遣をいただきましたし、採用増や任期付職員の大量採用に踏み切りました。この間、法令の範囲すれすれの対応、国に先んじた対応、制度変更を見越した対応も枚挙にいとまがありません。

職員の奮励努力に、県内外の様々な御支援・御協力が積み重なり、岩手県は、今、課題を抱えつつも、復旧・復興の道のりをたどっています。

地域を土台から作り直す、本当に必要とする方に支援の手を差し伸べる

災害応急対策や被災者・被災地支援は、自らの営みだけでは乗り越えられず、本当に必要な方々に対し、行政から、機を逸せず、温かみのある支援の手を差し伸べる仕事でした。被災地の復旧・復興は、単に壊れたものを元に戻していく作業にとどまりません。ダメージが大きかったがゆえに、未来を見据え、地域を土台から突き固め、一から再生させるといっても過言でない壮大な仕事です。

これらの仕事は、私に、公務員そして自治省職員を志した初心を思い起こさせてくれました。地域に活力を吹き込みたい、社会の中で問題を抱える人々のために尽くしたいということです。誤解をおそれずに言えば、この2年間、私は、公務員であることの意義を非常に大きく感じられる、そして、外目にもそれがわかりやすい仕事に携わってきたのかもしれない。しかし、振り返れば、入省以来の仕事は、目立つか否かにかかわらず、多かれ少なかれ、そうした意義を有していたと思われる。また、私に限らず、先輩同僚諸氏も同様の経験を積まれてきたはず。世間でくさされるセピア色の公務員像とは異なるこうした世界で存分に力を発揮されたい諸賢の到来を待っています。



防災拠点会議にて



議会答弁中の筆者